

W/W 11B2 1995年3月7日、14:05-14:45、ヴェディング地区 中庭に面した建物、  
閉じた窓

セントラルヒーティングの 暖房 雑音 音 万年筆 木の床の 上の ゴムの靴底 誰かが 窓を  
開ける 一羽の 鳥 トットララララ 中断 ツチチ ツチチ チチ ペンの 音 ほぼ  
一定した 運筆 一秒間に およそ 三回 中庭の 声 トルコ人の 母親 幼い 息子の 短い  
返答 目の前の 窓の 木枠の きしみ セントラルヒーティングの 暖房 その とても 規則的な  
雑音 ペンの 動く 速さで 頭が かすかに 揺れるのが 雑音に 唯一の 不規則性を  
もたらしめている 下の方 から 電氣的な かすれた 雑音 たぶん ドアの 呼び鈴 ペンの  
リズム 書いている 腕が 紙の 上を 軽く 滑る 腕が 一度 紙に 少し しわを よせる  
柔らかな 音 紙の 上の しわを 伸ばす 手は 服を まとっている 腕よりも 明るい 音を  
だす 弱く 震える ような 響き 一つの 瀬戸物の コップか 二つの 植木鉢が 触れ合ったの  
かもしれない 暖房の管の 中から ほとんど 聞こえない くらいの 別の 階の 誰かが 管を  
触ったかの ような 雑音 机の 上の ノートを 動かす 短く 何度も ノートの 紙が  
こすれる 常に ペンの リズム 規則的な 進行と 短い 中断 急いで 書きつけた 単語  
暖房の 雑音 そこに いつも ある 何かしら とても 遠くから 聞こえるもの 低く 不規則に  
広がる 響き または 多くの 響き 様々な 音 多分 どこかの 窓の 背後 からの 音楽  
ゴミが コンテナに 入れられる 一人の 子供の 声 一言 二言 だけ 暖房 ペン 紙の 上を  
すべる 手 くぐもった 閉める 音 たぶん 通りに 面した 建物の 扉 暖房 ペンで  
書くことで リズミカルになる 書くことによって 解放される 耳の 働き それは 雑音を  
不規則に 生じさせる そして 音の 高さが 旋律の ように 揺れながら 現れる ように さえ  
させる トルコ人の 少年の 声 いま 私の 窓の 近く 別の 少年が 答える そして 再び  
ペン だけ 暖房 また ゴミの コンテナが 開けられて プラスチックの 音が 放り込まれる  
下の方 から 何か 別の 覆われた ような とても くぐもった 音 暖房の 大きな 主音と  
繊細な 3度の 音程を 聴く 耳の 働きは 音が あちら こちらへと 揺れ 動いて いるかの  
ように とらえる 書いている 手の 小指と 木の 机が 軽く こすれる そばに 置いている  
ノートの 短く 硬い 音 小さな 飛行機 エンジンの 音が 低くなるのと 同時に ゆっくりと  
音が 小さく なっていく 他にも まだ 聞こえるものがあると思う けれど よく  
わからない 下の方で 木が きしむ たぶん 椅子が 動かされたの だろう 一羽の 鳥  
長く 伸びた 震えるような さえずり 三回から 四回の 繰り返しは その都度 ほぼ 同じ  
長さで ジェット機の 音に 溶け合う 騒音の グリッサンド その中で たくさんの 際立って  
高い 並行する 音が 多かれ 少なかれ いっしょに グリッサンドする それは 飛行機の  
エンジン音 よりも 比較的 早く 消える 今しがた 少し 遠くの 鉄と 鈍い鉄の 扉の  
ぶつかり 油を さしていない 扉の 蝶番の 三回 連続する 高く きしんだ 音 そして また  
さっきと 同じように ぶつかる 音 下の方 からの 静かな ざわめき 一秒間の 長さ  
再び 書く 音と 暖房 時折の 音 それが あまりにも ひそやかに まるで 誰かが 二、三言  
呼び掛けた かの ように 私の 耳に 入って くるので 空想 なのか 自分 でも わからない

階下の 椅子の 動き 短く Uと 言う ような 響き また たくさんの 窓か 戸の 背後  
からの ほとんど 幻のような 声 今 同時に さっきの さえずりを 繰り返す 鳥と  
ジェット機 前 よりも 遠く 離れて 数秒間 続く そして 鳥の 鳴き声が 止む まさに  
その 瞬間に 飛行機が だんだん 弱く なっていく 暖房と ペン 机の 上で ノートが  
ずれる 深い 呼吸 そして 書くことを 一瞬 中断した だけで 突然 耳の 中の 血の  
動きを 感じる 高い 繊細な 音 それは 今 この 瞬間も まだ 続いて ペンの 組織された  
リズムの 中で 暖房の 音と 交り合う 一度 少しだけ ペンが 引っかかる 下向きの 線を  
描く 音は 水平線の よりも 柔らかく 暗い 中庭の 少年の 叫び声と 短い 足踏み 今  
別の 鳥の ほんとうに 素晴らしい さえずり ツ ツ ツ ツ 一、二度 繰り返しが 続いて  
再び なくなる そして また いくらか あとに 続く 遠くの 子供の 声 一番 遠い 一番  
弱い 声が 暖房の 音と 交わる かのように 溶け合う 紙の 下方の 縁を 書くとき 木の  
机の 上に 置いた 手が 滑る

*(Übersetzung : Makiko Nishikaze)*